



金床の再掛（さいがけ）

師匠に弟子入りし10年近い修行の末、のれん分けとして独立します。その時、師匠から贈られるのは、鞆（ふいご）と金床（かなとこ）ハンマー各種、火箸各種などです。使い込んでゆくと金床は磨耗したり欠けたりします。小さな傷はヤスリや砥石を使って自分で直しますが、大きく傷むと自分だけでは修理できません。姫路では大阪から専門業者が出向き、近所の市川の河原で修理作業をします。それを当時、金床の再掛（さいがけ）と呼んでいました。これは昭和10年代の作業風景です。

図書『むらの鍛冶屋』には、滋賀県東浅井郡浅井町の記事として、以下のように書かれていました。

大阪から金床を直す職人がやってきたこともあります。昭和の初め頃だったと思いますが。それまでは鍛冶屋が寄り合って直したもので、私のところではハコマエ1人と槌打ち5人で輪になって打ったんです。やってきた金床直しは夫婦2人でしたが、次の代になると父親と子でやってきました。まず、自分達の親の代から全国をまわって金床直しをやってきたという証明書みたいなものを見せましてね。これは大福帳にそれまで頼んだ鍛冶屋が、「あんばいよくできた」とかいうようなことを書いてハンコを押していました。



衣川 信良 画

又、野崎準氏からの投稿では、東日本の鍛冶屋さんには独立して店を持つ時や金床が破損した時は仲間が河原に四尺のフイゴを持ち出して古軟鉄で金床の形を作り、上面に鋼板を鍛接して、秘伝の焼刃土を塗り、数人がかりで持ち上げる巨大な鉄箸でつかみ川に投入して焼きを入れたと聞きました。

焼きが入っていないというのは買った人がこれをやるという前提なのではないかと思いました。全体に焼きが入ってしまうというのは本当は鑄鋼かも知れません。そう言う鉄床もありました。地面に穴を掘り根石と木の切り株を埋め込んだ上にセットして使うのは昔のと同じでしたが。

参考図書

『むらの鍛冶屋』 香月 節子 香月 洋一郎 平凡社 1986
2001年5月1日 投稿者 野崎 準 金属博物館 学芸員

むらの鍛冶屋®

ホームページと電子メールをご利用ください。

URL <http://www2.memenet.or.jp/kinugawa/>
<http://www.kanamonoya.co.jp/>
e-mail ryou@memenet.or.jp



何でもお気軽にお尋ねください！！